

釣れ釣れなるままに

2006年思い出の釣行記 PART. 4

仁義なき戦い



鹿島釣狂

☆開催日	平成18年6月11日		
☆開催場所	エリモ港～南東洋		
☆入釣場所	東歌別		
☆潮	満潮	01:30	143cm
	干潮	09:04	9cm
☆釣果	アブラコ	484mm	4/15
	重量	600g	
☆成績	合計点数	1084点	
	成績	準優勝位	
		重量優勝(会員)	
	累計点	8点	(⑦欠①)

縄張り争いに4名が脱落

前回の大会を欠席しているので、2ヶ月ぶりの大会である。個人での釣行もそれなりの趣があるが、仲間と釣果を競い合いながら「ああだ、こうだ」「なんだ、かんだ」やるのが楽しさを倍増させる。今回は札幌交誼会岩本満氏他3名を含めて6名の臨時会員に乗っていただき、いつもより華やいだ雰囲気が出発した。

2・3日前から暴風雨波浪警報が発令されるほどに荒れていた天気が治まり、明け方には晴れ間も覗くとの予報である。しかし、夜半までしきりに降り続いていた雨は上がったが、バスから夜目で見ると日高海岸は、まだまだ余波のウネリが残っており、沖では高い波頭が立っていた。この時期の私の定番である東歌別は時化に強いこともあり躊躇することなくバスから降りた。

バス停を下った舟揚場では4名が竿を出しており、歌別漁港方向にある舟揚場にも釣り人の姿が見え、潮が引いた後に乗る予定の十八番の岩には、厳しい縄張り争いを覚悟しなければならなかった。舟揚場の4名の釣り人を横目に見ながら、隣にある溝で準備し始めると、その中の一人が近づいてきて「私たちは引き上げるので、この舟揚場を使うのでしたらどうぞ」とおっしゃってくださる。そして、4名とも一台の車に乗り込んだ。挨拶に向かうと、奥さんと2人の子どもを乗せた家族連れだった。釣り会に所属する4名が潮待ちのためにこの舟揚場で竿を出しているのだと勝手に思いこんでいたのだが、当面の競争相手がなくなってホッとする。

竿3本ともいつもの溝に近投してカジカを狙うがなかなかアタリが出ない。1本を遠投にしてみるとその竿に小さなアタリが出た。ハゴトコでも付いたかと竿を煽ると、ホンダワラを引き連れながら35cm程のアブラコが上がった。その後も思い出したような間隔で小さなアタリがあり、40cmを頭に3本のアブラコを追加した。しかし、カジカが来ない。2魚種で争う大会なので暗い内にカジカが来ないと不安になる。

老漁師がやってきて、バツカンに入れた4匹のアブラコを見て、「釣れているのはここだ

けだ、留吉の沢の方から歩いてきたが皆、全然釣れてねえぞ。」と言う。カジカはどうかと尋ねると「今の時期、カジカなんていねえぞ。以前はこの時期になると札幌からの釣り人で満杯状態だったが、ここ2、3年はめっきり少なくなった。魚がいなくなったからだろう。」と頼りないことを言う。

左の舟揚場に後から入った「夢」の会員に尋ねると、昨年の大会で50cmオーバーが出たので狙っているのだが、「カ」（カジカとは言えないような小もの）は何匹か来たがさっぱりだと言う。その「カ」でも欲しいのだが……。

俺の縄張りのはずが……

コマセやイカゴロをこれだけ打ち込んだのにカジカが来ないということは、この溝にはカジカがいないのだと判断し、右方向の舟揚場に移動する。その溝の前方には釣りを邪魔するかのようには3個の白いボンデンが浮いている。網でも入っているのだろうか？ 民家から出て来た老漁師が磯模様が眺めていたので尋ねてみる。「あれには、ウニを入れた籠が吊してあるんだ。網ではないので引っ掛かる心配はいらねえ。あそこらへんは、溝になっているから魚がおるはずだ。投げて見れ。ほれ、あそこで釣っている奴がおるが、魚なんていねえぞ。あそこはほんとに浅い盤の上なんだがなあ。」と言う。その釣り人は、老人の言うことは分かっているが、縄張り争いに勝ち抜くために、潮が引くまでの間、浅い盤の上に仕掛けを乗せざるを得ないのだろう。私にも同じ経験が何度もある。

老人が教えてくれた溝に移動し、白いボンデンの際を狙って打ち込む。そして、そのボンデンの近くにある私が乗りたい岩付近に向かって遠投し、その岩は私に占有権があるのだと意思表示を試みる。

間もなく、背後から釣り人がやって来て、私のバックンのアブラコを覗き見た。そして、無言で、私が打っている溝の右に頭を出してきた平盤に出て、同じ溝に向かって打ち始めた。私の竿の下をくぐって行ったのだから、道糸の向きで、どこに打っているのかを確認しているはずなのに、その上から被せてくる。意思表示のつもりで彼の道糸の下になった仕掛けを引き上げてもう一度打ち直してみる。しかし、気がつかないようだ。もしかして「知らぬ半兵衛」を決め込んでいるのか。間もなく、彼が仕掛けを取り込んだときに私の道糸とオマツリしたこともあり、ようやく道具を片付け始めた。そして、私の目の前を通り抜けようとした彼に「どこに向かいますか」と声をかけると、初めて「すまなかったね。迷惑をかけたようだね」との挨拶があった。ベストの背中に入れた刺繍から札幌の有名釣り会の会員であり、名前も判っているが、ここでは伏せておく。ゴホン。



縄張り争いに勝ち抜く

5時半、ご婦人が流れ昆布を拾うために私のいる舟揚場にやってきた。そして、腰に何本ものロープを巻き付けて座り込んだ。迷惑をかけてはいけないと「竿を上げますか」と聞いてみるが、そんな必要はないと言う。一応、バラバラと散らばった道具類をひとまとめに片付けて邪魔にならないようにする。

流れ昆布漁はサイレンや旗を揚げるようなことはなく、6時を合図に一斉に拾い始めるということだ。それで、30分前頃から流れ昆布が溜まっていそうな場所にデンと構え、この周辺は自分の縄張りだと主張するために座っているのだそうだ。実際には縄張りなどないのだが、その場所に座ることにより暗黙のうちにそれぞれの占有権を認め合っているのだ。6時を回った。目の前のご婦人は素晴らしい動作で彼女の縄張りにある昆布を拾い集めていく。

アブラコも縄張りをもつという。自分の気に入った岩穴を住み家にして、周辺にうろつく同族を追い払うというのだ。特に産卵期や子育て期はその特徴が際だつという。アユの友釣り然りである。

ヤクザの仁義なき闘いが釣りの世界に蔓延（はびこ）ってきた。私もその世界に身をどっぷりと浸かり、その習性が芽生えてきたようだ。とにかく、慎重に確保した縄張りに乗れる時間帯になった。股下の海水を漕いで竿3本を設置した。沖波は未だ高いがここはべた風状態である。波が高いと昆布の揺れで竿の扱いが難しくなるがそんな心配も要らない。

すぐに、近投の竿にアタリが出た。相変わらずアタリは小さいが45cmほどのアブラコが昆布の中から飛び出てきた。更に、イカゴロとカツオのエサに40cmオーバーがダブルで来た。遠投の竿にも同様のアブラコが来た。魚が出るのは遠投による1カ所と目の前のカケアガリ1カ所だ。この周辺の中投からは魚が出ない。正面沖にもいい昆布根原があるのだがここからも魚は出ない。右後ろにも昆布根原が広がっているが魚が出ない。いつも魚が出るのは前に書いた2カ所である。ここでは多くのアブラコの縄張りが確保できるのだろう。

8時になっても、嫁のカジカが来ない。ここでカジカの30cmでも出れば優勝をぐっと引き寄せることになるのだが……。歌別漁港で小物だがカンカイやカレイ、アカハラの縄張りがあるとガイド書に書いてあったのを思い出し、移動すべきかと迷う。しかし、大会の成績よりアブラコ釣りの楽しさを満喫するほうに軍配が上がった。この調子だと50cmオーバーの記録的なものが出るかもしれない。一大会の優勝より、年間最身長をねらった方の可能性が高いようにも思われる。

カジカの縄張りを発見できなかったが・・・

9時、老漁師が目の前にやって来て鉤（かぎ）爪の付いた長い棒を操りタコ穴のいくつかを探っている。前回捕ったタコ穴に本日はまだ新しいタコが縄張りを形成していないようだ。その老漁師と話していると、今まで見られなかったアブラコ独特の三段引きとなる

素晴らしいアタリが出た。確実に魚が付いていると思い、竿を煽るとすっぽ抜けてしまった。慌てて同じ所に入れ直すと同じようなアタリが出た後、昆布の密林を抜けて50cm超のアブラコが釣れた。コトの顛末を見ていたタコ捕りの老漁師がバツカンを覗きながら「ここにこんなアブラコの縄張りがあるのか」と、地元の海を縄張りとしている漁師からぬ言葉を呟いた。カジカの縄張りはとうとう発見できなかった。アブラコ50cm以下4本+4kgで900点程であろうか。入賞は無理だろう。

最初に入った溝でカジカのようなアタリがあり、根掛かりして仕掛けごと失ったのを思い出して、浅ましくも仕掛けが飛んだ辺りを捜してみる。以前の大会で、同じように嫁がなく、偶然にも潮の引いた溝からカジカの付いた自分の仕掛けを見つけたことがあったのだ。しかし、今回は魚の付いていない仕掛けだけを回収した。

エリモ港で審査した。2魚種身長+5匹重量による入賞の見込みはないが、身長はひょっとしてと期待しながら45cm以上のアブラコ4匹を提出した。会で新しく準備したデジタル式の秤に乗せると、ジャスト6kgと表示された。

身長を測っている吉井氏が、差し出された私のバツカンを覗き込み「これ誰のだ？」と聞いた。そして、アブラコはかなり縮まって48.4cmと計測された。釣り上げたときは確かに50cmを超えていたのだ。



審査結果は、大物アブラコに嫁のカジカを揃えたお客さんの岩本満氏が1284点で優勝した。その岩本氏が「つりしん北海道」取材のための写真を撮るといふ。アブラコ2本もって優勝者の横に並ぼうとすると、優勝者は真ん中だと言う。だから、釣遊会での優勝者である大前事務局長の横に並ぼうとすると大前氏が私を真ん中に入れるように移動する。うろろうしていると「鹿島、お前が優勝だ」と言われて初めて優勝なのだと分かった。はからずも、会としては、嫁をとった仲間を押さえて私が優勝だった。ゴホン、ゴホン。

審査結果

優勝	岩本 満	1284点 (アブラコ469mm+カジカ 414mm+4020g)	油駒三岩
準優勝	鹿島釣狂	1084点 (アブラコ484mm+ 0mm+6000g)	東 歌 別
3位	大前健治	1074点 (アブラコ328mm+カジカ 422mm+3240g)	菊 水
4位	堀内正博	1072点 (アブラコ432mm+カジカ 230mm+4100g)	旗場サキ
5位	吉井 博	914点 (アブラコ398mm+カジカ 204mm+3120g)	西 東 洋
身長優勝	鹿島釣狂	48, 4cm (アブラコ)	東 歌 別

岩見沢釣遊会第3回大会

大物 アブラコ 仲俣さん優勝

岩見沢釣遊会の第3回大会が6月11日、えりも町のえりも港から油駒間で20人が参加して行われ、アブラコの大量などを揃えた仲俣廣昭さんが優勝した。大雨による通行止めで、同町庶野から広尾町音調津間では実施できず、各釣り場はさまざまな釣り会がひしめき合う状態で、入れない会員も出た。仲俣さんはえりも町東歌別の船着き場に入り、マキエ、イカゴロでカジカを狙い、明け方までに45センチのアブラコ10匹を確保。身長賞となった48・4センチの大物を追加、重量を7・超えとし優勝した。

2位の大前健治さんは菊水に入り、42・2センチのカジカを頭に32・8センチのアブラコなどを提出した。南東洋でアブラコの43・2センチを上げたものの、もう1魚種のカジカが23センチと小さかった堀内正博さんは3位に泣いた。4位、5位に入った吉井博さん、嵐光博さんは、西東洋で45センチ超えのアブラコを上げたものや、やはりもう1魚種に泣いた。私は油駒三本岩に4人入り、波風とごみに悩まされながらも早朝、46・8センチのアブラコ、41センチのカジカなどを上げ、特別賞を受けた。

▽総合(2種+5)①仲俣廣昭1084点②大前健治③堀内正博④吉井博⑤嵐光博▽身長 仲俣廣昭アブラコ48・4センチ



左から2位の大前さん、優勝の仲俣さん、3位の堀内さん

【つれづれ】

- 16年第4回大会(7月18日 近浦 1120点)で優勝してから2年越しの優勝になる。
- カツオのエサが少なくなってきた。カツオを半分に切って使い、更に、皮の固い部分も使う。釣果にはあまり関係ないように思う。
- バスの中で、改良を加えていたソイの引き釣り仕掛けを嵐氏に提供した。先日、嵐氏から釣り会の情報等で五十嵐明氏の仕掛けを聞きつけて作ってみたものを提供いただいたのだ。周りから「仕掛け全体が大きすぎるな」との批判はあったが、自分としては最高の出来映えだと自負している。

○左隣の出岬に入った御仁が遠くから声をかけてくれる。「大漁だ」と手の幅を大きく広げてみせる。その御仁は手を横に振り「さっぱりだ」と示しながら、三脚にぶら下げたビニル袋から何か白いものを捨てた。どうにも朝方釣ったチビカジカのように思える。審査には満たないようなものなので投げたのだろうか。石のようにも見えるが、潮が引いたその辺りには石ころはないだろう。そんな風に思う自分の浅ましさに呆れてしまう。

○女房に送らせ、迎えに来させる。昼食時の祝勝会では安心して酒を飲む。

○磯舟が4艘出ている。流れ昆布を拾っているのだろうか。三本錨を投げ入れて引っ張っている。調査のためなのだろうか。